

<学外研修参加報告>

東洋大学「IR国際シンポジウム」

日時:2014年7月12日(土)

東洋大学において「IR室設立記念国際シンポジウム」が開催されました。「大学の教育改革とIRの役割」をテーマに、IRに関する国内の有識者や、IR先進国のアメリカより担当者を招いて開催されました。

アメリカより、ジョージア大学IR担当者から事例紹介として、経営側に分析・報告や意思決定の支援を行っており、経営面においてIRが役割を担っているとのことでした。

東洋大学では、2013年9月に学長直属の組織として、IR室を設置し、学内外の情報の収集や分析、情報提供による政策の支援を行っています。また、学内でのデータベースの共有・閲覧を可能にしたとの紹介もありました。今後はIR室を強化し、IR担当者の育成(大学院構想)を視野に取組を進めていきたいとのことでした。

「大学IR人材育成カリキュラム講習会」

日時:2014年9月25日(木)

九州大学大学院共通科目「大学IR人材育成カリキュラム」集中講習会がキャンパスプラザ京都で開催されました。同大学大学評価情報室の森雅生氏を中心に、効率的なアンケート調査のための情報処理技術、調査結果の統計分析などを講義されました。

同大学大学評価情報室では、IR実務人材を育成するため、大学院共通科目としてIRに関する講義実習を行っています。今回は関西地区において、テーマを絞った圧縮版で紹介されました。IRへのニーズの高まりを背景に、積極的な取り組みを行っている同大学は関東・関西を中心にノウハウや情報提供を進めています。

(教育企画室 林真弥)

<研修実施報告> IRer養成講座in九州

主催:教職員能力開発拠点(愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室)

開催日時:2014年10月24日(金)~25日(土)

TKPカンファレンス博多において「IRer養成講座」を2日間にわたり開催しました。当講座の目的は、教学IR実践のための、具体的手法等を学び、教学IRを実際の教育改善の場面で活用するための知識と技能を身につけることです。教育企画室では実践的指導者養成講座として、IRer養成講座とFDer養成講座を隔年で開催しており、これまで関東、東北、関西地区で行ってきましたが、今回は初めて九州地区での開催となりました。

1日目は、佐賀大学より西郡大氏に「佐賀大学におけるIR実践」として、同大学の実践事例をご紹介いただきました。2日目は、立命館大学の川那辺隆司氏より「IRのお題(リサーチクエスト)を立てよう」と題し、ワークショップを交えながら講演いただきました。本学からは、教育企画室より山田剛史氏と清水栄子氏が登壇し、「質保証とIR」「学生支援とIR」に関するレクチャーや、様々なワークショップを行いました。研修を通して、自大学におけるIR推進方法について参加者間で協議しました。

応募多数のため定員を増やし、40名に参加いただきました。九州地区をはじめ全国からIRに関心のある教職員に参加いただき、国立、公立、私立、教員、職員といった立場の異なる参加者同士での交流も見られました。参加者のアンケートからは、満足度100%の回答をいただきました。

近年議論が活発化しているIRですが、このような講座を開催することでIRを活かした教育改善が全国で取組まれることを期待します。

【参加者の声】(一部抜粋)

「IRの意味がよくわかった。本学が持っているデータをもとに研修会を開きたい」「IRについての考え方、本学への落とし込みの際の、組織の作り方の参考になった」「IRは、特別な組織が必要で、特別なメンバーが必要ではないかとの自分なりの認識が変わった」「国立、私立、教員、職員…と立場、背景の異なる方々と共に、ワークに取り組み、異なる意見を持ちつつ、同じベクトルへ向けてディスカッションできた。

(教育企画室 林真弥)

IRを教育改善の場面で有効にご活用いただくためにも、ご意見、ご感想、情報等をお寄せください。

発行:愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室

〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番 TEL:089-927-8922

URL <http://www.ehime-u.ac.jp/>

愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 ニュースレター
Office for Educational Planning and Research, Ehime University

Institutional
Research

News

2015
第2号



IRを“あたり前”から“ルーチン”へ

小林 直人 教育・学生支援機構 教育企画室室長



とかく「横文字ばかりで意味不明」と言われる教育改革の専門用語ですが、「IR (institutional research)」は最近急速に注目されるようになった横文字用語の代表格でしょう。例えば、医学教育の分野別認証評価に関して平成26年7月に開催されたワークショップでは、「IR」という用語が突然出てきた時に会場がどよめいたのを覚えています。ところが半年後、平成27年2月に同じテーマを扱ったシンポジウムでは、いつのまにか、医学部にもIR部門を設置しなくてはという認識が会場内のコンセンサスになっていました。

我々大学人は本来、大学における“あたり前の活動”としての「IR」に慣れているはずですが。データを集めて分析し外部に公表する、という行為は大学の不断の使命である研究活動そのものであり、「IR」に「research」という単語がついていることがそれを端的に示しています。そのはずなのに(私を含めて)教育や学生支援に関するIRに抵抗感を感じる大学人が少なくないのは、「IR」が密室の中で行われている、というイメージが先行しているからでしょうか。

一方で、「大学ポートレート」が導入され、また国立大学は第3期中期目標期間を直前に控え、大学としての説明責任がますます高まってきました。全学的な意思決定に役立つために学内の様々なデータを集約して分析する「IR」の重要性がこれまでに高まっています。従来から「IR」は大学にとって“あたり前”だったはずなのですが、大学がおかれている環境を考えると今後はそれを“ルーチン”化して、「IR」担当者が効率的かつ効果的に大学の意思決定をサポートできるようにすべきでしょう。

愛媛大学では、平成22年3月に教育・学生支援機構教育企画室が教育関係の全国共同利用拠点として認定されました。当拠点は、高等教育機関において「IR」を専門的に担当する教職員(IRer)の育成を主要な活動の一つとしています。これからも大学全体として、真に意味のある「IR」とはどういうものか、大学で効果的な「IR」を行うためにはどのような知識とスキルが必要か、皆さんとともに考えてゆきたいと思います。

—学外専門家からの寄稿—

IRの有効性と限界を理解する

名古屋大学 高等教育研究センター 中井 俊樹 准教授



現在、IRは政策的に推進されています。具体的には、IRの専門部署を設置し、学生の学習のプロセスや成果に関わるデータを収集・分析することで教育改革につなげる取り組みが期待されています。このように政策的に推進されて

いるIRには、どのような効果を期待することができるのでしょうか。

IRの有効性の一つは、現状を正しく把握し、適切な意思決定を行うことができることにあります。人々の思い込みと実際のデータの間には、大きなずれがある場合があるからです。

たとえば中途退学者を減少させたいと考えた時に、データなしに対応策を考えるのと中途退学者の属性や中途退学の要因をデータで理解した上で対応策を考えるのとでは大きな違いが生まれるでしょう。中途退学者の1割が経済的理由での中途退学ということが示されれば、中途退学の予防に経済的支援は1割程度の効果

をもつことがわかります。

IRのもう一つの有効性は、データを提示することで、構成員に対して説得力が増し、組織における合意が得やすくなるということです。伝統的に大学は構成員全体の合意を大切にしてきました。具体的な根拠となる情報が、組織での合意を得るにあたって重要な役割を果たします。

一方、IRには潜在的な限界もあります。教育の成果については、いかに指標を工夫したとしても、データはその一部しか表すことはできません。データによって可視化できないものが存在することを頭の中に入れておく必要があります。また、データは、大学のある現状を示すことはできますが、価値を伴う具体的な提案には直接的にはつながりません。なぜなら、ヒュームの法則として知られているように、「である」から「すべき」へは論理的には導くことができないからです。

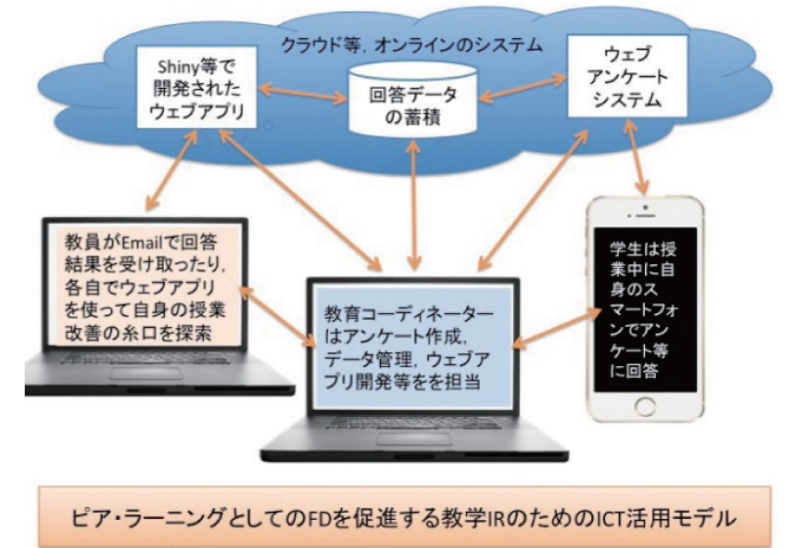
今後、IRは大学においてより重要な活動になることは間違いありません。大学の現場では、その有効性と限界を正しく理解した上でIRを活用することが重要だと言えます。

ツールの1つとして、私たちはICTを活用しています。

平成23年度採択の愛大GP「学部-全学連携IR体制の構築」以来、教育学部は教学IRの推進方法を探索してきました。当初はLMSによるデータ収集・分析・フィードバックを試みたのですが、現在はオープンソースの統計パッケージである「R」が教学IRに関わるデータ管理・活用に最適であると考えています。

目標としているのは図のモデルのような運用です。現在、学生がスマホ等を用いて授業アンケートに回答し、得られた回答を授業毎に整理・分析・グラフ描画し、それを各先生方に個別にEメールで配信する手続きをRで自動処理しています。将来的には、先生方がご自身で好きな時にマウス操作だけで気軽に分析できる環境を目指しています。それによって例えば「授業外の学習時間を伸ばすために有効な手だては何か」「実践力を伸ばせる授業だと学生が認識している授業ではどんな工夫がなされ

ているか」などの問いに対して、データに基づいた探索ができます。しかも、データ自体にはアクセスできない設定にすることで、プラバシーも守れます。このように気軽な教学IR環境を通して教育実践を改善するきっかけを提供するFDのあり方を今後も探っていきます。



—教育企画室からの報告—

全学対象アンケートのリニューアルと教学IRレポートの発行について

教育・学生支援機構 教育企画室 助教 清水 栄子

教育企画室では、全学生を対象とした調査の企画・立案・分析業務に携わっています。たとえば、入学生の動向を把握する『新入生アンケート』、大学での教育効果・学習成果を把握する『卒業予定者アンケート』、全学必修の新入生セミナーの効果把握する『新入生セミナーアンケート』です。昨年度から今年度にかけて、上述の3調査に関して、学生の学びの到達段階の可視化に主眼を置き、質問項目の見直しを行ってきました。昨年度は、新入生アンケートと新入生セミナーアンケートを、そして今年度、卒業予定者アンケートについても改訂の承認を頂き、平成26年度卒業予定者を対象に実査中です。この改訂に伴って、共通する質問項目として「愛大学生コンピテンシー」を取り入れ、入学前、全員必須プログラム、卒業段階において、どの程度身につけることができたのかを、段階的・継続的に把握することも可能になりました。

これらの調査の集計結果を、教学IRレポートVol.3『平成25年度卒業予定者アンケート結果』（改訂前の調査で実施）、Vol.4『平成26年度新入生アンケート結果』、Vol.5『平成26年度新入生セミナーA・Bアンケート』としてまとめ、学内関係者のお手元にお届けしました。IRレポートは、全学データおよび学部・学科（調査対象区分）で構成されており、全体および特定の学部・学科との比較が可能となっています。これらのデータは、学内限定で本学経営情報分析室のホームページ（学内限定：<http://www.ehime-u.ac.jp/~omia/naibu/shoyusIRyo.html>）でも、ご覧いただくことができます。今後の教育改善に向けて、ぜひご活用ください。なお、さらに踏み込んだ分析や追加分析を希望する場合は、教育企画室が随時コンサルティング（ニーズに応じた追加分析を含む）を行いますので、どうぞご連絡ください。

—学外学内実践事例—

教育学部の教学IR実践：ピア・ラーニングとしてのFDを促進するICT環境の構築

教育学部 富田 英司 准教授

大学は専門家が集まって知的探究を進め、それを通して人が育つ、協同知の場として発展してきました。その経緯から考えて、教員が自律的に協力したり、刺激を与えあったりしながら進めるピア・ラーニングとしてのFDが大学らしい教育改善のあり方だと言えます。

教育学部の教育コーディネーター会議はピア・ラーニングとしてのFD活動の実現を目指しています。授業方法について先生方の足りない点を指摘するよりも、先生

方の日々の実践に含まれる知恵や工夫を可視化し、お互いに学びあうことが理想的であると考えています。

先生方同士のピア・ラーニングを実現する上での障壁の1つは時間や労力の資源的制約です。先生方は既にそれぞれの教育研究上の課題に労働的資源の多くを注ぎ込んでおられます。授業参観や研修等、長時間の拘束を伴う試みに取り組む余裕がある方ばかりではありません。そうした中であっても、教育改善を支援する